



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

シリア：最近の情勢

主席研究員 中島 勇

7月18日にダマスカス市内で国防相やバッシュャール・アサド大統領の義弟を含む軍・治安部隊幹部が爆殺された後、シリア政府の統制が急速に弱体化するかもしれないとの見方が増えた。しかし、アサド政権の政治的権威は揺らいだとしても、体制は維持されており、政府側も反体制派側も、対決姿勢を一段と強めている。

国連では、ロシアと中国が19日にシリアに関する決議で、三度目の拒否権を行使した。そのため、安保理は20日、停戦監視団の任期を30日延期するだけの決議を採択した。米国は、シリア対応策を協議する新たな政治的枠組みとして「シリア友好国会合」などを活用する姿勢を強めている。他方、ロシアは、安保理での協議継続を主張している。

ダマスカス・アレッポでの戦闘

報道を整理すると、首都での戦闘は、7月14日から開始され、15日から本格的な戦闘になった。反体制派勢力は、一時は市内の複数の地区を占拠し、23日時点でも戦闘は継続しているようである。しかし、外務省報道官は、一両日中に政府軍が市内を統制化に置くと自信を見せている。アレッポでの戦闘は20日から開始され、23日まで4日間継続している。

7月19日頃から、反体制派は、トルコ、イラク、ヨルダンとの国境事務所を一齐に攻撃した。一時は、イラクとのすべての国境事務所を占拠したともいわれたが、22日時点では1カ所だけを占拠しているようだ。トルコとの国境事務所は3カ所を反体制側が押さえた模様である。

反政府勢力は、首都やアレッポで政府軍と戦う能力があることを証明したが、占拠を長期間維持する能力、占拠した地域を面として拡大していく能力については未知数である。また各地での政府軍攻撃が調整された攻撃であるのか、各地の勢力が勝手にやっているのかもはっきりしない。他方、アサド政権は、体制は維持しているが、首都や国境事務所に対する攻撃を許した上、早急に反体制派勢力を駆逐できないなど防御体制の弱さを見せている。また軍・治安機関の最高幹部が会合する場所に爆弾が持ち込まれた事実はあるとしても、反体制勢力がアサド体制に深く浸透している証左なのか、政権内部での権力抗争なのか、あるいは別の要因があるのか、今の時点では不明である。

化学兵器

アサド政権が崩壊するかもしれないとの見方が強まる中で、シリア軍が保有すると思われる化学兵器の問題への関心が高まった。米国は、シリア政府が反体制派に対して化学兵器を

使用する可能性を懸念し、また混乱の中で、化学兵器がテロ組織に渡ることを警戒する姿勢を明確にした。こうした中、23日、シリア外務省報道官は、国内で化学兵器を使用することはなく、使用するなら外敵に対してであると明言した。その後、同報道官は、発言を後退させ、もしそのような兵器が保有されているなら厳重に管理されているとした。シリアは従来から化学兵器の保有について曖昧な立場を取っていたが、今回は、一瞬であるが、化学兵器を保有していることを明示する姿勢を見せた。